

体育専攻大学生の道徳性に関する調査 —スポーツ行動と日常行動の比較—

A Survey of Physical Education Major Students' Morality: A Comparison of Sport Behavior and Daily Life Behavior

キーワード：コールバーク、大学生、フェアプレイ

阿江 美恵子

1. 緒言

2012年の第30回夏季オリンピック大会(イギリスのロンドン開催)のバドミントン種目女子で、2試合4チームがお互いに負けようとして、ミスを繰り返すという無気力試合となり、審判が警告したが行動が改まらないという事態が出現した。翌日、国際バドミントン連盟は、全員を失格とした(朝日新聞、2012)。無気力試合の理由は、グループリーグ後の決勝トーナメントで有利な対戦を得ようとしたからであった。

スポーツのルール遵守はフェアネス(レンク, H.とG. A. ピルツ, 2000)や体育と道徳教育問題(ドゥルー, S. B., 2012)などとして検討され、一般的な人間の好ましい社会的行動は、道徳性発達(デーモン, W., 1990)として研究されている。

阿江(2005)は、体育専攻女子大学生の道徳性の発達に関する調査を通して、体育専攻大学生がチームのために自分を犠牲にするよりも、スポーツルールを遵守するほうを選択するものが多いことを報告した。その研究では、とくにスポーツ場面で日常場面での行動を適用できるのか、という問題が残された。

そこで、本研究では、体育専攻大学生にスポーツ場面と日常場面両方の道徳的葛藤場面を提示して、どのような行動をとるかについて、コールバーク(1987)の道徳性の水準に準拠して調査を行い、スポーツ行動でのフェアプレイの問題を考える資料を得ることを目的とした。

2. 方法

①調査対象

体育専攻大学生女子86名 男子40名、大学の内訳はA大学58名、B大学68名、合計126名(2年生から4年生)。

②調査時期

2005年6月

③調査手順

筆者の授業の中で集団実施した。調査は研究倫理規定の作成される以前であったが、統計的にデータ処理をし、個人に迷惑はかからない旨を説明した。

④調査内容

スポーツ場面で意図的に反則するという物語文を提示し、反則をするかどうかについての設問、その理由を肯定回答と否定回答に分けた択一選択項目、スポーツ場面でのルールとモラルに関する二対六項目択一選択に回答させた。日常場面については、コールバークの用いた「ハインツの物語」についての設問、肯定回答と否定回答に分けた択一選択項目、日常場面での道徳的葛藤に関する二対五項目択一選択を用いた。

用いた物語文は表1に示した。

表1. 使用した道徳性の葛藤場面の文章

スポーツ場面	ハインツの物語
<p>オリンピックの出場をかけたサッカーの試合が行われています。SさんはF国チームのディフェンダーとして相手の攻撃を再三防いでいます。両チームの実力は伯仲し、終了5分前になりましたが2対2の同点です。そのとき、味方のクリアミスで相手チームのフォワードKさんがゴール目がけてドリブル突破をはかりました。SさんはKさんの足目がけて後ろから猛烈なタックルをしました。ボールではなくKさんを倒すためのタックルでした。</p>	<p>一人の女がガンで死にかかっています。その人を救うことのできる薬がありますが、それは非常に高価です。その人の夫であるハインツはお金をかき集めたけれど足りません。薬屋に安く売ってくれるように頼みましたが拒絶されました。絶望したハインツは薬屋に盗みに入り、妻のためにその薬を盗みました。</p>

3. 結果

①スポーツの道徳的葛藤場面に対する回答

図1は、スポーツ場面での故意のファウル行動に対する考えを、肯定、どちらともいえない、否定の3択で選択させ、男女別にまとめたものである。男子は7割以上と女子に比べて多くが故意のファウルを肯定することがわかった。次に、現在所属している運動部の種目の種類ごとに2群（球技種目88

名、球技以外種目37名、なお種目不明の1名を除く）に分類した。大学で運動部未加入者は、高校時代の種目に基づき分類した。図2は、種目別2群の反応をまとめたものである。球技以外種目群は否定的で、球技種目群は肯定することが示された。

上記の回答で「肯定」したものの46名（男子29名、女子17名）に、肯定する理由を回答させたものが図3である。対象者は46名で52%が「自分でできることなのにそうしなければ、一生後悔すると思うから」と回

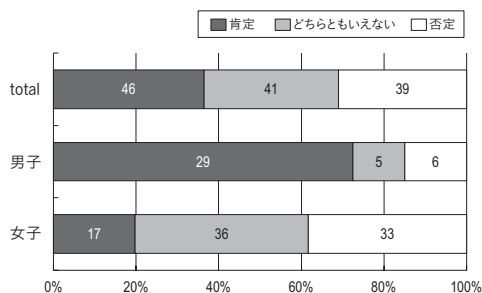


図1. 故意のファウルに対する評価(数字は人数)

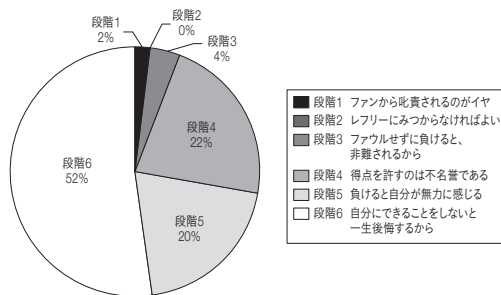


図3. ファウル肯定の理由

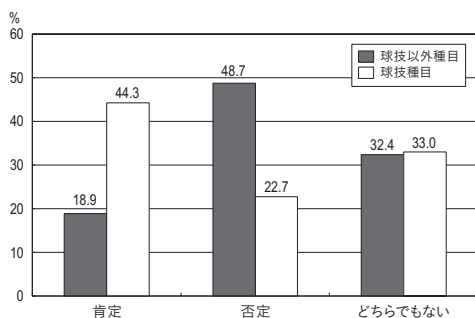


図2. 種目の違いによるファウルの評価

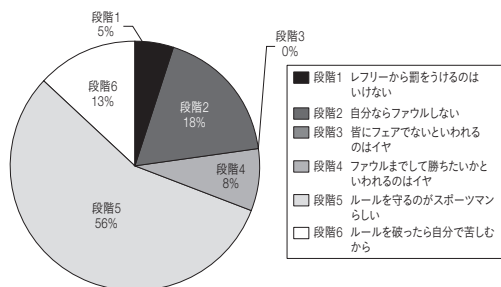


図4. ファウル否定の理由

表2. 道徳判断の6段階(コールバーグの理論に基づき、阿江作成)

段階	評定の基準	評定の例
1	物理的罰	レフリーとかルールに逆らうと罰を受ける。ファンからの厳しい叱責を与えられるのがいやだからファウルをしてもゴールを阻止する
2	個人主義的	自分はファウルしないようにする。レフリーに見つからないようにファールすべきだった
3	他者からの否定	チームのためにはなったが、皆にフェアではないと言われる。ファウルせずに負ければ、負けたことに非難が集中する
4	社会秩序の維持	ファールまでして勝ちたいと言われるのは嫌だ
5	社会における不名誉	サッカー選手として、相手の得点を許すことの不名誉 オリンピックを目指してきたのに負ければ自分が無力に感じられるだろう ルールを守ってこそスポーツマンである
6	自分の基準や原則を維持できなかったこと故の自己信頼の喪失	選手として罪はない。人は責めないかもしれないが、自分で苦しむかもしれない。 自分でできることなのにそうしなかったことは一生の後悔である。

答した。また、「否定」したものの39名(男子6名、女子33名)に、否定する理由を回答させたものが図4である。否定の選択肢はコールバーグの6段階(表2)に準拠したが、その妥当性は今回は検討していない。段階5とした「ルールを守ってこそスポーツマンらしいから」が56%であり、段階1、2の合計は23%であった。

②ハインツの物語への回答

図5は「ハインツの物語」のハインツの取った行動をどう評価するかの回答をまとめたものである。男子は半数が肯定しているが、女子は3割しか肯定していなかった。また、肯定48名(男子21名、女子27名)がその理由に回答した結果が図6であり、同様に否定したものの28名(男子6名、女子22名)の理由をまとめたものが図7である。肯定では、「妻を大切に思う

なら当然」、「そうしないと一生後悔する」というものが79%にのぼった。他方、否定では、53%が「盗みは犯罪なのでいけない」と回答した。

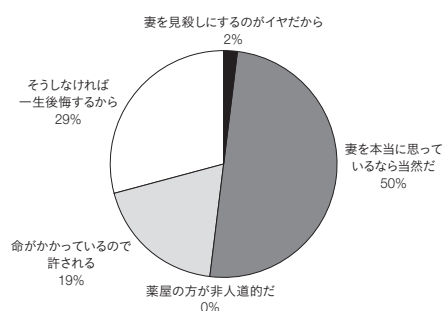


図6. ハインツの物語の肯定の理由

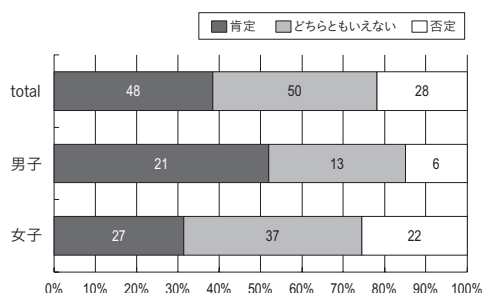


図5. ハインツの物語に対する考え(数字は人数)

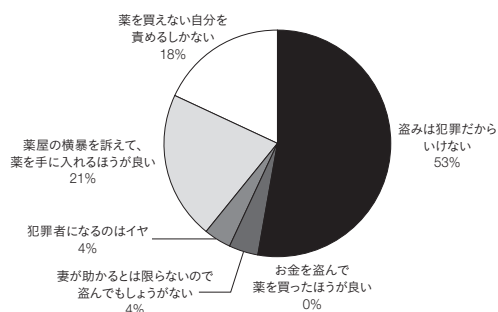


図7. ハインツの物語の否定の理由

③スポーツの行動と日常の行動との関連

大学の風土が異なると考えて、大学別にスポーツ行動と日常行動の回答への相関係数を算出した。その結果、A大学0.17、B大学0.11と大学による大きな違いはなく、スポーツ行動と日常行動は、低い相関しか示さなかった。

④二項目の相対的重要度

表3は、二対のスポーツ行動6項目の相対的重要度を示したものである。網掛けの「勝利―ファウルによる罰」は、圧倒的に勝利重視であった。また、「相手チームからの非難―ファンの声援」は、ファンの声援を選択したものが多かった。

表4は、二対の日常行動5項目の相対度数を示したものである。「犯罪を犯さない―妻が死ぬ」は妻の死を重視し、「自分の責任―薬屋の責任」では、自分の責任を重視し、「他人の非難―自分の良心」では自分の良心を重視し、「犯罪―人間愛」では、人間愛を重視し、「薬―寿命をあきらめる」では薬を重視、というように5項目全てでどちらかに明確に選択が偏った。

表3. スポーツ 左右項目の相対度数

ルール	0.5	0.5	勝利
勝利	0.9	0.1	ファウルによる罰
チームへの責任	0.6	0.4	自分への責任
オリンピック出場	0.6	0.4	フェアプレイ
良心	0.4	0.6	チームの勝利
相手からの非難	0.1	0.9	ファンの声援

着色は違いの見られた項目

表4. 日常左右項目の相対度数

犯罪を犯さない	0.2	0.8	妻が死ぬ
自分の責任	0.9	0.1	薬屋の責任
他人の非難	0.2	0.8	自分の良心
犯罪	0.1	0.9	人間愛
薬	0.7	0.3	寿命をあきらめるか

着色は違いの見られた項目

4. 考察

①スポーツ行動と日常行動の比較

主題としたスポーツと日常生活の行動の関連に焦点を絞って考察した。

今回の調査では、スポーツ行動と日常行動の関連は低かった。上野(2011)が指摘するように、「勝利が最終目的であるから、レフェリーの眼につかないところで反則を繰り返す。利益が最終目的であるから、人の眼につかないところで、マンションの耐震強度を、食品の産地を偽装する」ことが、スポーツ行動からの影響であれば、十分な注意が必要であろう。

スポーツ行動として、選手たちはフェアプレイを教育されるが、サッカーの国際大会を見ると、ファウルになってもゴールを阻む行動が公然と見られる。それが戦術の一部であるという考え方である。図2の球技種目群で、故意のファウルが多数から肯定されたことで、その考え方がすでに深く浸透していると考えられる。

他方、ルールを守ってこそスポーツマンであると考え、故意のファウルを否定する者も6割にのぼる。これは、学校教育の中でスポーツを発展させてきた日本人のスポーツ教育の成果であろう。

スポーツの葛藤場面での考え方は、日常生活での道徳的な考え方とは異なっていた。日常場面では、人道主義、人間愛的な考え方が示された。これは、スポーツ場面では現実行動として反則が多くの人目に触れているが、日常場面で「ハインツの物語」のような人生の岐路を現実に体験している対象者は少ないと考えられる。そのため、調査結果は、観念的になってしまったとも考えられる。

②スポーツの葛藤場面での行動理由

図3、図4はコールバークの道徳性の水準に基づいた6段階の理由を用いた。コールバークの分類の低い段階は少なかった。しかし、主観的な回答項目を用いたため妥当性に問題があり、結果は断定できないことを指摘しておく。

したがって、以下は段階の検討でなく重要な試合で勝つためにファウルすることを大学生スポーツ選

手がどのようにとらえているか、という結果に限定して考察した。

ファウルの肯定群では、勝敗、特に勝つことを重視していることが読み取れる。他方、否定群は圧倒的に「ルールを守るのがスポーツマン」「ルールを破ると自分が苦しむ」「ファウルをしてまで勝ちたくない」と、フェアな行動に重きを置いていることがわかる。男子に肯定が多く、女子に否定が多かったが、男子の人数が少なかったことと、球技種目に加入しているものが多かった点から、男女差よりも所属している運動部の種目の影響が強いと考えられた。また、スポーツの勝敗を重要とする認識は球技種目群で大きく、球技以外種目群は勝敗よりもフェアに行動することを重視していると言えそうである。

道徳性の発達分析を行った櫻井(2011)の研究では、小学生から大学生まで、女子の方が発達段階が高いことが示された。今回用いた段階が発達段階を正しく示すと仮定すれば、対象人数が少ないものの男女の違いは小さく、女子の発達段階が高いということは見られなかった。

表3で9割が勝利を重視しているが、行動の選択はルール厳守と勝利が相殺していた。今回のオリンピックの無気力試合の問題は、ルール違反と言うより、まさにフェアプレイの問題である。オリンピックでの勝利重視傾向が、選手の行動をアンフェアにした可能性を指摘できるであろう。

今回の研究は、調査対象者が少なかったため、結果の断定はできない。将来の研究に期待したい。

5. まとめ

コールバーグの道徳性の発達段階に基づいて、スポーツ場面、日常場面の葛藤について体育専攻大学生男女を対象に調査した。

その結果、スポーツと日常場面で同じような行動を選択するとは言えなかった。

スポーツでは、球技種目所属者が故意のファウルに肯定的で、球技種目以外所属者はルール遵守を重視することが示された。

引用文献

- 阿江美恵子(2005)コールバーグの道徳性発達理論のスポーツ場面への応用——フェアプレイと関連させて、東京女子体育大学紀要、40: 43-48. 朝日新聞、2012年8月2日朝刊1面.
- Damon, W. (1990) 山本多喜司編訳、道徳発達、社会性と発達心理学所蔵、北大路書房、pp. 354-372.
- Drewe, S. B. (2012) 川谷茂樹訳、スポーツと体育における道徳教育との関わり、スポーツ哲学の入門所蔵、ナカニシヤ出版、pp. 118-124.
- コールバーグ、L. (1987) 水野重史監訳、道徳性の形成、新曜社.
- レンク、H.とG. A. ピルツ(2000) 片岡暁夫監訳、関根正美、深澤浩洋、窪田奈希佐、笛木寛訳、フェアネスの裏と表、不昧堂、pp. 35-36.
- 櫻井育夫(2011) Defining Issues Testを用いた道徳判断の発達分析、教育心理学研究、59: 155-167.
- 上野耕平(2011) 杉原隆編著、第8章スポーツによる社会化、生涯スポーツの心理学所蔵、福村出版、p. 97.

追記

本研究は、2005年日本体育学会第56回大会でポスター発表したものに加筆修正したものである。まとめるまでに時間がかかったことは、著者の責任である。